

東京大学 海外留学・国際交流プログラム報告書(3ヶ月以上1年未満)

2017/10/9

東京大学での所属学部・研究科等:	教養学部	学年(プログラム開始時):	学部4
参加プログラム:	全学交換留学	派遣先大学:	ベルリン自由大学
卒業・修了後の就職(希望)先:			
<input checked="" type="checkbox"/>	1. 研究職	<input type="checkbox"/>	2. 専門職(医師・法曹・会計士等)
<input type="checkbox"/>	3. 公務員	<input type="checkbox"/>	4. 非営利団体
<input type="checkbox"/>	5. 民間企業(業界:)	<input type="checkbox"/>	6. 起業
<input type="checkbox"/>	7. その他()		

派遣先大学の概要

ベルリン自由大学は、ドイツの首都ベルリンに位置する、1948年に設立された、ドイツの中では比較的新しい国立大学である。ドイツの占領期に、それまでのベルリン大学(現在のフンボルト大学)がソ連占領地区に含められた。学問の自由を求め、教授らを始めとする研究者たちが、アメリカの支援を受けベルリン南西にあるダーレム地区に設立した大学である。

留学した動機

留学を希望するに至った理由は、二つに大別できる。一つ目は、何より自分の学習テーマによるものである。近現代のドイツの歴史に興味を持ち、進振りを意識した頃より日本で、遠い西洋の国の歴史として勉強していたが、ドイツにおける最先端の歴史学のアプローチはいかなるもので、それがどのように発展され、営まれ、教育されているのか直接学びたいと思ったからである。二つ目の理由としては、留学という経験に付随する、生活や社会の多様性を実感する経験が挙げられる。どこの国に行くのであれ、自分にとって慣れた日本の環境から離れ、価値観の異なる世界で生活するという事は、刺激の多いものである。学部生の中に、自分が体験したことのない世界があり、自分の知らない理屈で社会が動いているということ、体感することは、自分の視野を広げ、一人間としての成長を見込めると思ったからである。

留学の時期など

①留学前の本学での修学状況:	2016年	学部4	年生の	S2	学期まで履修
②留学中の学籍:	留学				
③留学期間等:	2016年	10月~	2017年	7月	
	学部4	年時に出発			
④留学後の授業履修:	2017年	学部5	年生の	A1	学期から履修開始
⑤就職活動の時期:	年		年生の		月頃に
⑥本学での単位数:	留学前の取得単位			87	単位
	留学先で取得し、本学で単位認定申請を行う単位				単位
	留学後の取得(予定)単位				単位
⑦入学・卒業/修了(予定)時期:	2013年	4月入学	2018年	3月卒業/修了	
⑧本学入学から卒業/修了までの期間:	5年		ヶ月間		
⑨留学時期を決めた理由:					

学部生で留学を開始する時期は、二つのパターンを想定していた。一つは、3年次後半から開始するもので、二つ目は、4年次からである。前者の利点は、一つあげれば、上手くいけば4年で卒業できることである。一方で、短所は、ドイツ語で主に授業が行われるため、3年次では語学力の点で準備不足になる可能性があるということである。また、知識の面でも足りないと感じるかもしれない。一方、後者のパターンは、5年間学部生をすることは必須になる。これをどう考えるかは人によると思う。ただ、この条件を受け入れれば、前者の二つの短所は一年間の準備期間で一定程度克服できるはずである。また、ドイツ留学に行った人の多くが、3年次に行った場合でも計5年間学部生をしている人が多く、結果的に学士課程に5年間かけるのであれば4年次に行った方が、準備期間に余裕が持てると考え、学部4年次後半からの留学に決めた。

留学時期を修士課程にするという選択肢もあるが、留学の動機である学業と多様性の経験の二つのうち、後者はとりわけ学部生という若い段階に留学することで得ることができるものであると考えていたので、学部段階での留学を決めた。

留学の準備

①留学先大学への入学手続き(手続きにあたってのアドバイスなど)

東京大学の全学交換留学プログラムを通して、留学を申し込んだ。派遣大学(東京大学)の推薦を得られれば、(*ほとんど)留学先の大学の留学許可が下りることになっていると理解している。留学に際する書類がメールで届くが、ベルリン自由大学の場合は、6月ごろになってやっと送られてきた。それまで、返信がなかったりするが焦る必要はないと思う。(*国際交流課追記)

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

日本国籍の学生が、ドイツでの学生ビザを取得する方法は、日本で取得する場合と、現地に行って旅行ビザでの滞在が認められている3ヶ月以内に取得する場合の二通りあります。私は、後者の方法で取得しました。というのも、学生ビザの取得は、ベルリン自由大学に留学する場合は簡潔です。ベルリン自由大学には、ビザの申請を代行する部局があるからです。そのため、外国人局に並びに行く手間は省けました。日本で申請するにしても、ドイツでするにしても、必要な書類を早い段階で準備しておくことが重要です。ドイツで申請する場合は、生活費を工面することができることを証明する書類などは、大使館で取得するものがあるなど注意点はいくつかあります。詳細な申請に関する情報は、ドイツ大使館のホームページで確認するようにして下さい。

ビザの取得は比較的簡単ですが、一方で、ビザ以外の事務的手続きが煩雑であるので、補足としてここに説明したいと思います。ドイツに着いて「合法的に」生活をするために必要な手続きのうち特に重要なものは以下の通りです。

- (1)住居登録(Anmeldung einer Wohnung)
- (2)保険加入の手続き開始
- (3)学籍登録(Immatrikulation)
- (4)(5)ビザの申請及び銀行口座開設

これらの手続きは、番号の順に検討すると良いと思います。若い番号の書類がなければ、次のステップに進めないようになっています。まず一番重要なのは、住民登録です。その後の手続きに、住民登録の証明書が必要になってきます。この手続きのための予約(Termin)をとるのが難しいです。場合によっては、3ヶ月先になることもあります。なので、(5)のビザをドイツで申請する場合は、日程的にギリギリになってしまいます。(ただ、住民登録の予約が取りづらいという事情は、周知の事実であり、ビザの申請の際には、3ヶ月以内に余裕を持って予約を取ろうと努力したことを説明することでビザを認められる場合もありますが、オススメはできません。)通常インターネット上で予約を取るのがですが、私が留学した時は、直接住民局(Bürgeramt)に行って予約が取れるところがありました。もし、可能なら直接出向いた方が良いと思います。インターネットと電話、直接の予約で予約の割り当てが違う場合があります。

(2)を「保険加入手続き」と書いたのは、加入が完了してなくても、私の時は、次の学籍登録ができたからです。というのも、保険料の支払いのために、銀行口座が必要ですが、銀行口座の開設のためには、学籍証明が求められます。ですから、保険加入手続きを始めて、学籍登録が必要なことを伝え加入手続きをしている旨を書いた書類を受け取り、それを学生課(Studierendenverwaltung)に提出して学籍登録することが重要です。

③医療関係の準備(出発前の健康診断、常備薬、予防接種等)

ベルリン自由大学に留学することによって発生する特定の医療関係の準備はないと思います。個人の都合に合わせて準備されると良いと思います。

④保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

留学にあたって、東京大学本部から保険加入の案内があります。これは、通称「付帯海学」と呼ばれる保険で、東大から留学する人が義務的に加入することになっています。ただ、ベルリン自由大学に留学する場合は、この保険は学籍登録の際に認められません。したがって、この付帯海学は不要となるのですが、東大本部からの回答では、留学者全員に加入をお願いしているということで、加入せざるを得ませんでした。

ベルリン自由大学に留学する場合は、大学内に出張所のあるAOKという保険に加入することになると思います。ベルリン自由大学到着後に手続きすることになります。私が留学した時は、ベルリン自由大学に学籍登録する場合は、学籍登録が済む前でも出張所でこれから学籍登録する旨を述べれば、保険加入に必要な書類の一覧が渡されました。それから、それぞれの書類が整うたびに提出し、全て揃えば加入ということになります。

⑤留学にあたって東京大学の所属学部・研究科(教育部)で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

留学開始の前年度の10月ごろに、東京大学で募集された全学交換留学に申し込んだ。帰国後は、留学先で履修した単位を振り替えて、卒業に必要な単位に組み入れる予定。

⑥語学関係の準備(出発前の語学レベル・語学学習等)

留学時期を4年次の後半にしたことや、初修時代から丁寧に語学学習に取り組んでいたため、語学力の壁は感じなかった。

⑦日本から持参の方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

文具類は、日本とは大きさや仕様が異なるため、持参することをオススメします。特に、ボールペン(ドイツでは太いタイプしか売ってません)、シャーペン(もし必要なら、シャーペンはほとんど手に入らないです。また、書類はテストの答案用紙も含め、全てボールペンで書きます)やノート(罫線の太い、リングタイプが主流)は持っていくと良いと思います。証明写真も、印刷したものとデータの二種類持参すると、手間が省ける場合があります。

学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(授業を履修した場合)

※そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったもの(又は行う予定のもの)に●をつけてください。

授業科目名	単位数	単位認定の申請	授業科目名	単位数	単位認定の申請
歴史学入門(冬学期・ゼミ)	2	●	ドイツ帝国(1871-1918)の歴史(夏学期・ゼミ)	2	●
歴史学入門(冬学期・講義)	2	●	フランス革命(夏学期・ゼミ)	2	●
ドイツ・アイデンティティ(冬学期・ゼミ)	2	●	近世のグローバル・ヒストリー(夏学期・講義)	2	●
政治学入門(冬学期・講義)			ドイツ語学期前準備講座		●
冷戦史(夏学期・ゼミ)	2	●			

②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

ゼミの授業形式は、事前に課題文献が与えられ、それらを予習した上で、講師との対話を中心に授業が進められる。講師は、問いを投げかけたり、学生の発言に対し反論などを行う形で、講師中心の議論を形成して行く。議論の流れに従って、問いの内容が変わるため、網羅性や計画性はそれほど感じられないと思う。さらに、多くの授業で発表や報告が義務付けられていた。歴史文化学部の授業では、大枠のテーマが決められ、その範囲内で発表のテーマを自由に選ぶことができるものが多かった。ベルリン自由大学の歴史学部の特徴は、社会構造史、ジェンダー史の視点及びグローバル・ヒストリーがとりわけ盛んに取り組まれていることであろう。講義のテーマ設定や手法が独特であった。フランス革命に関する授業を受講したが、サブテーマとして、フランス革命における女性の役割や植民地「からの」影響などを、前者はフランス革命に活躍したOlympe de Gougesと彼女が発表した『女性と市民の権利宣言』を参照しつつ、この概念において旧来のものと新たな意味とが混在する非同時代物が同時に存在した時代において、彼女の考えがいかに旧来の概念枠組みの中で成立し、それが同時代人にどう受け止められ、その後の新たな概念理解にどのように影響を与えたのか分析していった。後者に関しては、フランス革命と総称される短期的な変化の原因を、フランス国内の政治的及び経済的抑圧の構造だけではなく、植民地と本土の間での相互関係とりわけ植民地があったからこそ生じた国内的政治的主張を取り上げ、歴史的出来事を構造の中に位置付け、構造と出来事の間の影響関係を考慮し、さらに地理的に分析範囲を拡大して、分析する視点を学んだ。そういった視点は、たとえ既知のテーマであっても、浮かび上がる因果の糸の多様さ、立体さを可能にするものであり、知的感動をかき立ててやまない。

③1学期あたりの履修科目・単位数、週あたりの学習・研究時間(授業時間・授業以外の学習時間)など

歴史学部の学部生では、一週間の履修コマ数はおよそ4~5コマが平均だと、聞いた範囲では推測しています。それぞれの授業の予習と復習にそれぞれ4時間程度かかるという目安でしょう。

④学習・研究面でのアドバイス

アドバイスできる立場にはないと思うが、留学してきた経験者として、3つの点だけ挙げておきたい。一つ目は、語学にはなるべく早い段階から継続的に丁寧に取り組むこと。ドイツ語の場合は、文法だけ頭に入っているだけでは不十分で、リスニングやスピーキングにも同程度取り組むこと。その際、文法事項に立ち返りながら学習すると良い。とりわけ、発音は軽視される傾向にあるかもしれないが、きちんと正しい音で、ドイツ語特有の文のリズムに合わせて発音できるようになれば、良い。何も完璧にできる必要はないが、取り組むか取り組まないかは、実際に留学を始めた時に、その効果は瞭然たるものである。

まず何から始めるかわからない人は、DWのTop-Thema mit Vokabeln (<http://www.dw.com/de/deutsch-lernen/top-thema/s-8031>) から始めると良い。スクリプトもあり、音声は全てダウンロードできる。もちろん無料である。

二つ目は、自信を持って話し切るということである。最後まで、言い切る。ドイツ語という言語の性格もあり最後まで話さなければ、内容が確定しないということもあり、逆に言い切る癖がつくといいのであるが、曖昧に語尾を濁らせると、たとえ正しいことを考えて発言しても伝わらない。そして、どんなに相手の反応が不明瞭でも一つの文は言い切ることが大切である。

最後に、ドイツでの学生同士のものも含め、全員が知っていると思われる内容は、口に出さずとも話しの前提になっていることが多い。ただ、知らないこともあろう。そういう時は、常識の範囲内で、知ったかぶること。(知ったかぶりだけでは、成長はないことも付言しておく)

⑤ 語学面での苦勞・アドバイス等

語学は、特に力を入れて取り組む必要があります。残念ながら、語学力が足りなければ、知識があっても知らないこと、分からないとみなされてしまいます。特に心がけると良いのは、(1)お腹から声を出して、(2)ゆっくりと落ち着いて(3)出来れば文法を意識して話すということです。他のドイツ人学生や、講師の話し方を真似するようにして、練習すれば良いと思います。

生活について

① 宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

初めの6ヶ月は、留学申し込み時に、ベルリン自由大学を介して紹介されたアパートの個室。後半の6ヶ月は、自らで探したWG。ベルリンは、他のドイツの諸大都市よりも家賃が低いかつていわれていたが、近年は家賃は上昇傾向にある。さらに、その上昇傾向に歯止めをかける政策がうまくいっていないということを既成事実として利用し家賃をさらに底上げする業者が多いように感じた。ベルリンの中でも、地区により家賃が大きく異なる。ベルリン自由大学が位置する、ベルリン南西部のダーレム(Dahlem)地区やそれに隣り合わせであるグリュエネヴァルト(Grünwald)地区及びその周辺は、地価がかなり高い。後者は、ベルリンで地価が一番高い地区である。一方、ノイケルン(Neukölln)やフリードリヒスハイン(Friedrichshain)などは家賃が比較的低いため学生が多く住む街である。

② 生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

ベルリンに到着したのが9月初旬であった。その頃は、晴れの日が多かった。日がまだ長く、夕方日が沈むまでの時間が楽しみになるほど快適な時間であった。しかし、10月後半あたりから、曇りがちな天気になった。日が急激に短くなるようも感じられた。実際には、日が出ている時間は短くなっているが、天候と相まって急に冬に突入して行く、速さが感じられた。ドイツの冬は、冷たく暗い。日が、日の出以降も雲に隠れて、出ず、日が差すことは稀になる。10時ごろから次第に明るくなり、灰色の空が続き、そして16時ごろにはもう暗くなった。太陽の光を浴びず、寒い気候が続くため、精神的に辛く感じるかもしれない。5月ごろから春が来る気配がする。雪が溶け、晴れの日には時折恵まれる。青い空が垣間見えるのが大きな変化かもしれない。それ以降は、日が経つに従い伸びて行く。長い夕方は、ベランダでワインを片手に食事をとったり、川辺に座ったり、カフェのテラスで談笑したりと、楽しみ方が随分と増える。歓び溢れる季節になる。

ベルリン自由大学は、ベルリン南西部のダーレムを中心に研究棟が点々と散逸している。ダーレム地区にあるキャンパスはいくつかあるが、キャンパス図書館(Campusbibliothek)及び文献学部(Philologische Fakultät)や、食堂(Mensa)が入っているキャンパス周辺は、日本で大学周辺に期待するような居酒屋であったり、食堂やカフェや娯楽施設が、ほとんどない。あつたとしても、学生は全くといっていいほど利用していない。このキャンパスに行くために多くの人が利用するU-Bahnの路線3番(U3)は、他の路線から乗り継げば、明らかに乗客の裕福さが違うことに気づくかもしれない。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

留学中は、日常的な犯罪及び、時局的な危機の二つに気を使わなければならなかった。前者には、スリや窃盗、強盗などの犯罪が含まれる。海外に行く際には、よく言われる「日本とは違うのだ」ということを常に頭にとどめておくことが大事だと感じた。私自身は被害になったことはないが、観光地周辺ではアジア系の留学生を中心にスリにあう学生が多かった。ただし、CharlottenburgやDahlemの家から大学との間を往復する際には、治安の悪さを感じることはほとんどなかった。

一年間のドイツ滞在で一番気を使ったのは、健康面である。身体的な健康を維持するために、大学付属のジムに通った。ジムといっても、一つの教室のような広さの部屋に、ジム器具が窮屈に置かれている。どれくらい窮屈かというと、ラットプルダウンを体を反らした形で行うと壁に背がぶつかるような感覚で器具が並べられていた。さらに、男性の更衣室はその狭いジムの一角をベニヤ板で囲っただけの空間を利用していた。トレッドミルも一台しかなく、不便に感じた時もあった。通常ジムには3、4人程度しかいないため、不便さが苦痛になることはなかった。ただし、大学のジムがあるのが、Lankwitzのキャンパスであった。そこは主に地質学などの学部が入っているのだが、歴史学部の学生が普段利用することはない。上で述べたダーレムのキャンパスからバスで25分程度かけて通う必要があった。

異国での生活で、想像以上に負担を受けているのが、精神的な健康である。

④留学に要した費用について(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

・毎月の生活費とその内訳

毎月の支出は、平均して1300ユーロ程度であった。このうち家賃は550ユーロ、食費が400ユーロ程度であった。さらに、保険が100ユーロ弱、娯楽費が250ユーロ程度かかった。授業のために必要な書籍は全て大学のシステムを経由して配布されたので、授業料と教科書代は一切かからなかった。自分の関心で読んだ本や、楽器のレンタル代、博物館等の入場料は娯楽費に含めた。

・留学に要した費用総額とその内訳

概算であるが、13ヶ月分の生活費と渡航費(1400)、滞在中の旅行代金(1000)が総費用を占める大きな支出の категорияである。

$1300 \times 13 + 1400 + 1000 = 19300$ (単位はユーロ)

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)

東京大学を通して応募した財団から留学開始から終了までの奨学金を得、生活費に充てた。それに加え、東京大学ドイツ・ヨーロッパセンター(DESK)から渡航費に充てる奨学金を受給した。

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

ベルリン自由大学のオーケストラ、「コレギウム・ムジクム(Collegium Musicum)」に所属していた。初めは、ドイツのオケの勝手が全く分からないまま、練習場所に行きなんとか加入できた。座る場所も、決まっているのか決まっていないのか不安に思いながらも続けていたが、毎週の練習の後に飲み会(Stammtisch)があることを知りそれに参加するようになってから、一気に交友の輪が広がった。さらに、年二回の定期演奏会に参加し、そのうち一回はクラシック音楽好きなら必ず知っているであろうホールでの演奏機会にも恵まれた。オケの友人たちとは、学期休みの間にもほとんど毎週のように遊びに出かけた。公園の芝生の上で、ただ音楽と(重低音の鳴り響くグループのある音楽の方だが)とビールとフリスビーを持って、日が暮れるまで談笑するのが、最高に充実した時間の楽しみ方だと知った。

自主的に留学生が参加しているInternational Clubという団体がベルリン自由大学にある。冬学期は留学生同士で集まることに関心を抱けなかったが、実にさまざまな国と地域から来ている留学生と交流する機会を逃すのは勿体無いと思い、最後の学期は参加することにした。一学期10ユーロの加入費を払えば、International Clubが企画する遠足やパーティに参加できるという仕組みである。ハンザ都市として有名なハンブルクやロストック、ブランデンブルクにあるリュッペナウ(Lübbenau)の水路巡り及び仮装船コンテストの見学、宗教改革の文脈で有名なヴィッテンベルクなど、多様な催し物にそれぞれ移動費を含み15ユーロ程度で参加できるようになる。個人で行くと交通費だけで15ユーロ以上かかる。

派遣先大学の環境について

①留学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

他の大学に比べると、サポート体制が整っていると聞いたことがあるが、十分なものであるかは疑問が残る。ベルリン自由大学の留学生に対するサポート制度は、まさに杓子定規的で、官僚主義的な対応が一体どういったものか体感できる点のみ長所がある。語学面のサポートとは、何を指しているのか分からないが、語学講座として理解すれば、Das Sprachenzentrumを挙げることができるだろう。これは、ベルリン自由大学の建物の一角にある語学学習のための教室のことを指している。そこでは、語学教材をその場で使用することができ、また備え付けのパソコンでは、教材をパソコン上で利用することができる。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC環境等)

ベルリン自由大学には、ダーレム地区のキャンパスには図書館が3つある。それぞれ、大学図書館(Universitätsbibliothek)、キャンパス図書館(Campusbibliothek)、文献学部図書館(Philologische Bibliothek)である。さらに、各学部の図書館がある。ただしこれらの図書館は、東京大学で一部を除くすべての学部の図書がオンラインで貸出できるようなシステムでつながっているわけではなく、他の図書館からの書籍の取り寄せを可能にしている図書館もあれば(大学図書館など)、書籍の貸出は原則禁止でかつオンラインでの取り寄せも不可能にしている図書館(歴史学部の図書館)がある。

また、書籍の並べ方も、東京大学の図書館がそうであるように、テーマごとに区分され著者名などに従って配架されているわけではなく、購入順に並べている図書館もあり(大学図書館)書架を実際に歩いて書籍を集めるのは苦勞する。しかしオンラインでの取り寄せが可能のため、他キャンパスから取り寄せを行うことをお勧めする。健康管理に関する欄で、述べたがベルリン自由大学にはKRAFTKLUBというジムがある。このジムは、Unisportという団体によって運営されている。ジムの他実に多様なスポーツコースが提供されている。無料のものもあれば、有料のものもある。学生の料金は低く設定されており、手軽にスポーツを行う機会になっている。日本では、クラブやサークルに加盟し、団体意識を持って活動していることが多いが、ベルリン自由大学のスポーツコースは、各自が加入したい学期に参加するというフレキシブルなものになっている。

文献学部図書館があるキャンパスには、PCプールがある。そこでは、ZEDATアカウントという大学関係者に与えられたアカウントを使ってログインし、使用することができる。印刷も有料ではあるが、可能である。大学の建物内では、Wifi(ドイツ語ではWLANと書かれる)が提供されている。

食堂は、ドイツ語でMensaであるが、文献学部図書館があるキャンパスに一番大きな食堂がある。また、歴史学部や法学部など学部の建物にもそれぞれ食堂がある。法学部の食堂は、ベジタリアン用の食事が提供されている食堂である。もちろん、ベジタリアン以外の人も利用できる。

留学と就職活動について

①(就職活動を既に行った場合)留学が就職活動に与えた影響、メリット・デメリットなど

いわゆる就職活動と称される活動は行っていないため、①～④は省略いたします。

②(今後就職活動を行う場合)留学が就職に対する考え方に与えた影響

いわゆる就職活動と称される活動は行っていないため、①～④は省略いたします。

③留学中の就職活動への対策など(もしあれば)

いわゆる就職活動と称される活動は行っていないため、①～④は省略いたします。

④就職が決まっている場合は、差し支えない範囲で就職先をお知らせください

- | | |
|--|--------------------------|
| | 1. 研究職 |
| | 2. 専門職(法曹・医師・会計士等)(職名:) |
| | 3. 公的機関(機関名:) |
| | 4. 非営利団体(団体名又は分野:) |
| | 5. 民間企業(企業名又は業界:) |
| | 6. 起業(分野:) |
| | 7. その他() |

留学を振り返って

①留学の意義、留学を通じて成長したこと、その他留学を通じての所感

関心のあったテーマを掘り下げて取り組むことができたこと、そして多様な世界観に触れる機会があったこと、これらの経験は帰国してからも帰国していることが夢だと感じるほど自分の感性を揺れ動かした。さらに、避けては通れない留学ハードルを、完璧ではないにしろ飛び越えたという感覚は、心の奥底で自信を与えてくれているように感じる。

留学の意義については、いろんな人がいろんなように表現していることは、留学を考え始めた時から聞いてきた。視野が広がる、いろんな国の友人が出来る、語学力が上がる、などなど様々なメリットを聞いて来た。しかし、実際に行ってみて感じることは、それらのメリットを言葉として聞いて想像していたものを、ことごとく超えたものを体験しているという感覚である。

②留学後の予定

留学後は、学部課程の冬学期の授業を履修する予定である。その間に、卒業論文の作成及び大学院入試に備えている。

③今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

留学は、成長への段階です。学業や生活上での挑戦に溢れているだけでなく、多様な社会を目の当たりにすることは、どのような道に今後の人生を進めていくにしろ大きなアドバンテージになります。留学というと、華やかなイメージが多いかもしれませんが、一方で、事務的な手続きなど地味な作業も多いです。それでも、準備を含めての留学と思い、そこからも多くのことを学びとるつもりで取り組んでほしいです。

留学してよかったという思いは、留学中を通して、また帰国後も変わることがないですし、今後変えるつもりはないです。大学で、街で、学友と、想像を常に超える刺激を与えられるなどと想像だにしませんでした。ベルリンという街で一年過ごし、一見カオスな世界、いやカオスという秩序が成り立つ街、ドイツの大学の特殊性、そして独特のある種の田舎臭さとそれが故の開かれた社会を志向する動きのようなものを肌で感じることができるのは、留学した者の特権だと思いました。さらに、客人としてだけではなく、どこか自分もベルリンを舞台にした小説の主人公ではないかと感じさせるほど、ベルリンに溶け込む、ちょうど観光客としてきている人を裏側から見るような感覚を味わうことができるなど、学部生という若さが故に可能だったこともあると思います。

成長の実感、広がる視野に自らが驚くという体験、これらは留学した者だけが味わうことができる特権事項です。苦労もあるかもしれません。その苦労も、後々に振り返ればそれらの出来事は繋がって見えてくるかもしれません。

その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

留学には正解も、絶対的な方法論もありません。それゆえに、絶対に正しい情報源もないと思います。

私はなるべく多くのブログや体験記(東大のホームページで提供されているものも含む)を読むことをお勧めします。そして、それらをあくまで参考に使用してください。鵜呑みにせず、多様に検証できるように様々なメディアを駆使して情報を集めることをお勧めします。従ってこの今読まれている報告書も批判的に読んで、アップデートしていただきたいと思います。SNSなどもその点で有効かもしれませんが、記載情報をどう扱うのか検討する必要があります。

留学前にいくつかの元留学生や、現在の留学生、さらにドイツ在住の日本人のブログなどを参照しました。それぞれ各自の体験や経験、見聞に基づいて書いていると思います。非常に詳細に書いているものもあれば、何かのサービスに誘導しているものもあります。たとえ悪意がなくとも、情報の正確さや客観性にかけているものもあります。それでも、複数の情報源を参照することで、自分の留学をシュミレーションすることは意味のあることだと思います。

ベルリンは、現代的に特色あるだけでなく、歴史的な積み重ねが街のいたるところに感じられる都市です。幾重にも、時代の層が堆積して現在に至っている都市です。「ベルリン論」という分野があっても不思議ではないほど、多様な側面を見せる都市であり、思想家や歴史家、文学者、作家などがベルリンを題材に作品を描き、そして「ベルリンを」論じてきました。その都市の縦糸を紐解きたいという方には、網羅的に列挙しませんが、以下の書籍をお勧めします。

平田達治『ベルリン・歴史の旅-都市空間に刻まれた変容の歴史』、大阪大学出版会 2010。(地名の謎など、例えばベルリンになぜケルン(今ではNeuköllnだけが残るが)があるのか、などを歴史的に触れた章は読んでおくと、行った時に地名を覚える手助けになるかもしれない。その他の章もおすすめ。

Bernd Stöver, Geschichte Berlins, München 2010. 歴史学徒以外にも有名な歴史家によるベルリンの歴史の概説。ベルリンに行くと、歴史の残像を探しに行くような遠足に参加する機会がある。そんな時に前知識があると理解が一層深まる。日本語では知っているが、ドイツ語の名前がわからないものなどのドイツ語表現を学ぶためにも必読の書。

ヴァルター・ベンヤミン「1900年頃のベルリンの幼年時代」、『ベンヤミン・コレクション3記憶への旅』、筑摩書房 1997。

森鷗外『舞姫』(複数の出版社が、『舞姫』を含む書籍を出版しています)(太田豊太郎と同じルートで歩ける)
「音楽に興味のある方へ」

②その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい留学中の写真があれば添付してください。

以下に6葉の写真を添付します。



